

第13回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

【優秀書評賞】

山下 太一（経済学部 3 年次生）

「かがみの孤城」

辻村 深月／ポプラ社(2017 年)

【佳作】

花田 朱理（経済学部 3 年次生）

「最後の秘境 東京藝大天才たちのカオスな日常」

二宮 敦人／新潮社(2016 年)

新井 慎（経済学部 3 年次生）

「羊と鋼の森」

宮下 奈都／文藝春秋(2015 年)

【総合講評】

図書館長 法学部教授 瀧澤 仁唱

書評は、その元になる本がないとなりたない。いわば本体に付属する影のようなものである。しかし、書評によって元の本が書き直されてより良くなる場合があり、影が本体を変えるときもある。書評によってまだその本を読んでいない多くの人々がその本を読むようになる可能性もある。書評は羅針盤のような役割をもつことがあるので、もっと重視されるべきだと私は考えている。

今年の書評賞の応募本数は 23 点であったが、審査対象外(出版後 6 年以上たったもの、本学で所蔵していないもの、応募フォーム設定外のもの)になったものが 8 点あった。審査対象になったも

のでも、本の紹介や単なる感想文もあった。ネット社会で横行している剽窃(コピペ)がないか、図書館事務室課員および教員の図書館委員が点検した。受賞作品の最終選考では、その本の内容と書評を逐一照らし合わせ、書評が妥当か図書館委員が点検した。

今年の入選は、優秀賞が 1 点および佳作 2 点であった。

優秀賞は、辻村深月『かがみの孤城』(ポプラ社、2017 年)である。

物語のあらすじを上手くまとめるとともに、対象図書の特徴についてしっかりと言及出来ている書評である。特に、子供たちの精神的な成長を描いているだけでなく、周りの大人の心情についても丁寧に描写していることを指摘した点は、この本が単なる子供たちの成長譚にとどまらないことを的

確に説明できており高く評価できる点といえる。ただ、第3部の内容に関する説明で、「7人はそれぞれ別の時代から鏡の世界に来ていたのである。」との記述があったが、この点については直接的な記述を避けるべきであったろう。評者は、この本の良い点の1つとして伏線の張り方およびその回収の妙をあげているが、「登場人物が異なる時代から集まっていた」というところはまさにこの物語における重要な伏線回収の箇所であろう。それは、筆者が読者にミスリードさせるための話を終盤に入れていることから窺えることであり、この部分に関する記述にはもう少し工夫が欲しかったといえる。

佳作は以下の二点である。

(1) 二宮敦人『最後の秘境 東京藝大 一天才たちのカオスな日常—』(新潮社、2016年)

評者の書評の書きぶりが、本書の作者のそれと同じ雰囲気や漂わせており、どちらも軽快に読み進めていくことができる。本書では、東京藝術大学のメインキャンパスにある美術学部と音楽学部の特長や学生・教員の間違った個性を、両学部を対比させながら、紹介している。書評では、それらの内容一つひとつを紹介するのではなく、読者の興味をひくようなかたちで上手くまとめられている点は高く評価できる。

また、評者の「彼らは皆、好き・嫌いという次元を超えて芸術とつながっているのだ」という解説は、両学部の学生の底流にある共通性を本書から読み取った、評者独自の視点として優れたものである。

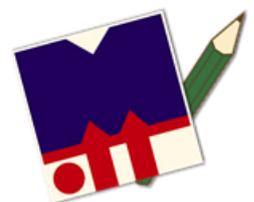
本書では、両学部の違いだけでなく、筆者が「美と音の化学反応」という言葉で表現する融合の部分についても最終章で書かれているが、それ以外の章の内容に比べて物足りなさを感じざるを得ない。そこが本書の限界であると思うのだが、評者はそのあたりについては、本文を要約するだけで済ませており、もっと踏み込んだ批評的なコメントがあっても良かったのではないかと思う。

(2) 宮下奈都『羊と鋼の森』(文藝春秋、2015年)

書評は整然と書かれている。あらましを7行でまとめ、本書の良いところ4点、悪いところ2点、4行でまとめている。この書評は、真っ当な本に対し

て、真っ当なことを書いたと思えた。

本を読み始めて、「羊と鋼の森」=ピアノに気づく。「羊(フェルト)のハンマーが鋼の弦を叩く」。外村の祖母は貧しい村で生まれ、若くして結婚し、三十代で夫を亡くし、牧場で働きながら、貧しいままシングルマザーとして娘と息子を育てた。「祖母は羊の世話をし、鋼(包丁)で子供に食わせ、森を見ていた。祖母は必死に自分の人生(森)を調律していた。ピアニストの夢を「病気」で諦め、ピアニストへの道を決意した姉(和音(かずね))のピアノを調律したいと言う一卵性双生児の姉妹の妹「由仁」(ゆに)。「ピアノで食べていける人なんてひと握りの人だけよ」という母親に対して言った和音の言葉は衝撃だ。「ピアノで食べていこうなんて思っていない。ピアノを食べて生きていくんだよ」。由仁は祖母だ。由仁(ゆに)はユニオン(調和、結合)のユニだ。由仁は全てを調和させる。外村は和音のために、「ほとんどすべてのピアノの調律に採用されている」平均律ではなく、「音の響きを優先した」純正律を採用した。純正律は「一音ずつの周波数の比が整数比になるように規定されている。」「いくつかの音を重ねたときに、周波数の比が単純であればあるほど、美しく響く」。この宇宙は波動に支配されている。「羊と鋼の森」は、全ての「夢」が「夢」となるこの世の地獄が少しでもましになるように全ての波動を調和させようと覚悟を決め、歯を食い縛って生きてきた(生きている、生きようとする)女性たち(著者、宮下奈都の同志)(へ)の物語だ。



【 優秀書評賞 】

「かがみの孤城」

山下 太一(経済学部3年次生)

本書ではいじめが原因で不登校になった中学生、こころが主人公である。ある日、こころは謎の少女オオカミ様によって鏡の中にある孤城へと招待される。城にはこころ以外にも心に傷を負った中学生の男女6人が招待されていた。フウカ、ウレシノ、マサムネ、スバル、アキ、リオンの6人だ。そんな中オオカミ様は7人の子供に鍵探しを提案する。城の中に隠された鍵を期限までに見つけた者だけが何でも1つ願いを叶えられる。ただし、ルールがある。城には門限があり、朝9時から夕方5時までしか居られない。これが物語の概要である。私の家族はよく親戚の子供を預かるので、子供と接する機会が多い。そんな中、本書を読んで7人の子供たちに感情移入することがよくあった。身近にいる子供がいじめられ苦しんでいるとき、どのように接すれば良いか分かんと思い本書を選んだ。

本書は3部で構成されており第1部はこころが学校でいじめられ不登校になった経緯が説明されている。こころはクラスメイトからいじめを受けていたのだ。その後、こころは不登校になり民間支援団体スクールの喜多嶋先生と出会う。こころが唯一心を開ける相手である。鏡の城ではそれぞれ心に問題を抱えた子供たちが不器用ながらも互いに打ち解けていく。しかし、終盤には互いにすれ違いが生じ陰悪な関係になってしまう。第2部ではこころが城の子供たちや喜多嶋先生との交流を深め大きく成長していく。その結果、こころはクラスメイトにいじめられていることを初めて母親に打ち明けられた。また、城に集められた7人の子供たち全員が同じ学校だということが明らかになる。第2部はこころを含めた子供たちが最も大きく成長していくシーンとなっている。第3部では子供たちが現実世界の学校で会う約束をする。勇気をもって登校したが彼らが学校で会うことはできなかった。ここで彼らは自分たちがそれぞれ別の時代から城に来ていることに気づく。7人はそれぞれ別の時代から鏡の世界に来ていたのである。最終的には7人の子供全員が成長し心の問題を解決したと捉えることができる。

本書の良い点は主に3つある。1つは、ファンタジー要素が苦手な方でも抵抗なく読めることである。鏡の中に別世界があると聞くと非現実的な印象を受ける。しかし鏡の孤城での子供たちのやり

取りは非常に現実的なものなので、違和感なく物語を楽しめる。2つ目は伏線の張り方・回収が非常に長けていることである。物語の中盤までは読者の興味を引く伏線をいくつか張り、終盤からエピローグにおいて一気に伏線を回収する。本文で読者が抱いた疑問を終盤まで引き延ばすことによって、読者が結末を想像しながらより楽しんで物語を読み進めることができる。私も終盤になって、城に集められた7人の共通点やオオカミ様と喜多嶋先生の正体を知ったときは、自分の予想と全く違ったことに驚いた。3つ目は子供だけでなく大人の心情もしっかり描写されている点である。本書では子供が抱えるトラウマや不安感のみならず大人が子供に向ける期待感、苦悩、苛立ち等の感情もよく描かれている。特にこころの母親がわが子に向ける感情は非常に鮮明に描写されていた。大人と子供双方の心情をバランスよく描いているので、どの年代の読者でも感情移入し易くなっている。しかしながら、本書には悪い点も2つ見受けられた。全体的に見て文章が読みづらい箇所があるのだ。所々で一文が長く、読点を使っているがあまり効果はないように思える。もう少し一文を短く表現すると読みやすくなるだろう。もう1つは登場人物が多いため本文を理解しづらくなっている点である。本書には登場人物の挿絵が冒頭に載っているのだが、名前は記載されていない。挿絵と一緒に名前も載せることで、読者がよりスムーズに物語を捉えることができるのではないだろうか。

本書では問題を抱えた子供たちが困難を乗り越え成長していく。大人も子供が抱える精神的な痛みをどうすれば癒してあげることができるか、非常に考えさせられる物語である。悩んでいる子供やその両親に是非読んでほしい本である。



【 佳 作 】

「最後の秘境 東京藝大

—天才たちのカオスな日常—

花田 朱理(経済学部 3 年次生)

東京藝術大学、通称「藝大」。我が国唯一の国立総合芸術大学には、私の想像を遥かに超える「カオス」が存在していた。

上野にある藝大のメインキャンパスには、美術学部の“美校”と音楽学部の“音校”がある。不思議なことに、この 2 つのキャンパスにはそれぞれ異なる世界が広がっている。外見や時間の感覚、金銭感覚、防犯意識、すべてが正反対。わかりやすく言えば、音校は厳格で美校はゆるい。例えば、音校に入っていく学生の外見は、短髪にカジュアルなジャケット、白いワンピースにハイヒールなど。みな姿勢が良く表情も明るいため、芸能人のようなオーラを放っている。もちろん授業は時間厳守で、予習は必須。扱う楽器は高価なものが多いため、セキュリティは万全である。対する美校の学生は、真っ赤な唇、巨大な貝のイヤリング、モヒカン、蛍光色のズボン、ボサボサ頭に上下ジャージなど外見に関しては何でもありだ。雨が降ると授業は休講になり、教授会議はほぼ全員遅刻。キャンパス内はどこでも入りたい放題で、拳句の果てにはホームレスの家まである。普通なら交わらないであろう両者が同じ学校に通う、それが藝大だ。

本書には、著者が複数の藝大生にインタビューを行っている様子が記されている。読み進めるうちに、全く別の世界にいる美校と音校の学生、両者の共通点がだんだんと見えてくる。私たちにとって芸術は、生きていく上でなくてもよいものだ。しかし、彼らにとってはなくてはならないもの。美校のある学生は「美術は腐れ縁的な存在だ」と述べ、音校のある学生は「音楽は離れたくても離れられないもの」と表現している。私は、藝大生に対して「音楽やモノづくりが好きで好きでたまらない」というイメージを持っていた。だが、本書を読んでそのイメージは崩れ去った。彼らは皆、好き・嫌いという次元を超えて芸術と繋がっているのだ。

そんな天才たちが、藝大だからこそできることがあると口をそろえて言う。それは、美と音の融合だ。著者はこれを、「美と音の化学反応」と表現している。美校と音校が協力して、アート展示や即興コンサートを行ったり、音校の学生が作成する CD ジャケットの絵を美校の学生が描いたり。音校が必要とする楽器を美校の学生が手作りする

こともある。美校と音校の敷地が繋がっているように、美術と音楽は繋がっている。

この天才たちの化学反応を、私たちが目にすることが出来る瞬間がある。それは、藝大の学園祭「藝祭」だ。藝祭では、新 1 年生たちが美校・音校混成で 8 チームに分かれ、それぞれ神輿パレードを披露する。神輿と法被は全て手作りで、音楽と歌ももちろん実演だ。各科の得意技が惜しみなく繰り出されるそのパフォーマンスは、芸術そのもの。これに対して学長は、「お前ら、最高じゃああああああア!」と絶叫する。本書を読むと、一度は藝祭に足を運んでみたくなるはずだ。

全体的に読みやすい文章で、会話の掛け合いもよく表現されていると感じた。「…」や「!」、擬音語もうまく使用されていて、会話の雰囲気や登場人物の性格、楽器の音色などを容易に感じ取ることができた。また、節々に藝大生に対する尊敬の意を感じられ、好感を持てる表現も多くあった。あえて気になる点を挙げるとするならば、本書の構成だ。本書は 14 のトピックに分けられており、トピックごとに複数の学生が登場する。この構成自体は、学生同士を比較したり、共通点を探すという点において優れていたと感じる。しかし本書には、1 つのトピックだけでなく複数のトピックに登場する学生も多すぎた。そうすると、1 人ひとりの学生のイメージが断片的になってしまうというデメリットが生じる。複数のトピックに登場する学生を頭の中で整理するのは難しく、流れをつかむのに少々時間がかかったように思う。本書に登場する学生たちは皆、個性に溢れていて素晴らしかった。だからこそ、1 人ひとりのストーリーもしっかりと味わいたかったというのが正直な意見である。

インパクトのあるタイトルに負けない、濃密な内容であった。藝大についての知識は全くなかったが、本書を読んで藝大も藝大生も大好きになった。なにより、純粹に面白かった。「そんなバカな」というフレーズが何度頭を過ったことだろう。藝大生の奇想天外な回答に対する著者のツッコミも絶妙で、まさに抱腹絶倒だった。本書に登場する天才たちには、読者を魅了する力があつた。著者と天才たちが起こす化学反応には、読者を笑顔にする力があつた。本書は、不思議な力が詰まった 1 冊だ。

「羊と鋼の森」

新井 慎(経済学部3年次生)

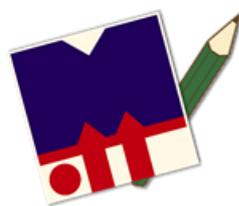
本書は、調律の専門学校を卒業し尊敬する調律師の働いている楽器屋に就職した新米の調律師「外村」が主人公である。高校のピアノの調律を合わす為に来た、調律師である「板鳥宗一郎」に出会い、調律をされた直後のピアノの音の「美しさ」に感動した高校生が弟子入りを志願するも断られ、代わりにピアノの調律の専門学校を教えてもらう。卒業した後、調律師になり就職した楽器店の同僚の先輩や調律を依頼してきた様々な人々と出会い「どうやれば上手く調律ができるようになるのか」を模索し、答えを導き出そうとする物語である。

本書の良いところは4つある。1つは、調律師という一つの職業に就いた青年が、「どうやれば上手く調律ができるようになるのか」、「調律師に必要なものは何なのか」を考え様々な人と出会い自分なりの正解を導き出そうとする真剣な姿を見られるところである。1つのごとくに熱心に向き合い試行錯誤し努力する姿はとても純粋な姿であると感じた。2つ目は、和音と由仁という姉妹の話である。「いきいきとしたピアノ」を弾く妹「由仁」に対し「音楽とも言えない音の連なりを弾く」姉「和音」の話である。病気にかかりピアノが弾けなくなった由仁、それが原因で姉の和音も弾けなくなったのである。しかしながら、立ち直りピアニストを目指すと言った和音と、その姉の弾くピアノの調律をするという由仁、姉妹たちの「夢」が見つかる場所である。今行っていること、あるいは続けていることが将来への「夢」となり、それに向かって頑張ろうとする人の姿が描かれている。3つ目は、登場人物のほとんどが優しく穏やかな人物なのでとても読みやすいという点である。主人公は調律師として悩んでいた、落ち込んだりしたところにやさしく手を差し伸べるかのようにアドバイスをしてくれる同僚たちなどがおり、とてもそういう点ではとても読みやすい作品である。4つ目は楽器店の先輩「柳さん」が外村に対して言った(p125)「才能とは、ものすごく好きという気持ちなのではないか。そこから離れられない執念、闘志と似ている何か」という一文がある。これは読者の持っている「才能」の意味を変化させるかもしれない。私は習い事として合気道の練習を小学校1年生から現在に至るまでしているが、小学生の頃「習わせられている」と感じていたが中学生になった時、それが「ものすごく好き」に変わったので、この文章はとても心

に残った。この4点が本書の良いところであると感じた。

しかしながら、本書には2つ悪い点がある。1つは、ピアノや調律に関する知識が皆無であると内容が頭に入ってきにくいという点である。柳が和音と由仁のピアノを調律する場面や板鳥が高校や発表会でのピアノを調律する場面でみられるのだが、「ハンマー」、「チューニングハンマー」、「フェルト」などの専門用語があるのだがそれを理解していないとなかなか「内容や情景」などイメージできない側面があると考えられ、それにより読むペースが落ちる可能性がある。2つ目は、「調律」や「ピアノ・音色」に対する比喩表現がわかりにくいという点である。例えば調律をされたピアノで試し弾きをするシーンがあるのだが、「くるくるとした曲だった」、などといった表現があるのだがどんな音なのかがイメージができない側面が多々存在するのである。この2点が本書の悪い点であるように感じた。

この本は、1つの職業に出会い、その職業に就きひたむきに頑張っている人が主人公なので、常に応援したくなる気持ちになる物語である。社会人になって働いているときに「仕事に対する悩み」などが生じたとき、またジャンルを問わず「夢」を持ってこれから叶えようと頑張っている人にぜひ読んでいただきたい本である。



書評とは・・・「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

<今回の募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後 5 年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
 - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
 - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
 - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件**(主要項目のみ抜粋)
 - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
 - ・本文は 1,500 字以上 2,000 字程度とする。
 - ・A4 版横書き、全てを 1 ページに収める。本文は、40 字×50 行の設定とする。
- 募集期間** 2018 年 5 月 15 日(火)～10 月日(水) ●**入選発表** 2018 年 11 月 30 日(金)
- 授賞式** 2018 年 12 月 19 日(水) ●**応募点数** 23 点
- 入選各賞**
 - ①**最優秀書評賞** 1 篇 表彰状および副賞(図書カード 1 万円)
 - ②**優秀書評賞** 2 篇 表彰状および副賞(図書カード 5 千円)
 - ③**佳作** 5 篇 表彰状および副賞(図書カード 3 千円)

☆次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)

